

# 初等教員養成におけるコード付け伴奏学習の取り組み —授業改善の過程と改訂版テキスト導入の効果—

明和 史佳, 望月たけ美<sup>1</sup>

An Approach for Learning Piano Accompaniment with Music  
Chords in Education for Elementary School Teachers  
:A Process for Improving Teaching Methods  
and the Resulting Effects with a Revised Edition Textbook

Ayaka MEIWA, Takemi MOCHIZUKI

2019年11月7日受理

## 抄 録

常葉大学教育学部初等教育課程では、歌唱共通教材を用いたコード付け伴奏の技能学習を通して音楽知識を身につけ、子ども達が楽曲の良さを感じ取り、楽しんで演奏したり思いをもって表現することを導くことができる伴奏能力の育成を目指している。2016年度の先行研究では、学生の歌唱共通教材に対する理解や、コード付けの理論的理解に課題があることが明らかになった。そこで2016年度以降歌唱クラスを導入し、授業形態及び内容の改善を行ったほか、2017年にはテキストを改訂し、理論的知識の定着とより表現豊かな演奏の実現を図ってきた。これらの取り組みの効果を明らかにするため2015年度～2018年度の学生アンケートの結果を比較し4つの項目について検証したところ、2017年度以降において全ての項目で改善がみられた。特に「コード奏の修得度」「コードのしくみについての理解度」が大きく向上し、授業改善と新テキスト導入の有用性が明らかになった。

キーワード：小学校教員養成、音楽科教育、コード付け伴奏、歌唱共通教材、  
小学校学習指導要領（音楽）

### I. はじめに

常葉大学教育学部初等教育課程では、1年生を対象とした必修科目「音楽IA」において、初等音楽教員に必要な音楽知識、演奏技能を身につけることを目的とした授業を行っている。この授業では小学校の音楽科授業で必ず取り扱う小学校歌唱共通教材を用いて、読譜などの音楽知識を学ぶと共に、児童の発達段階に合わせた豊かな音

<sup>1</sup> 教育学部非常勤講師、小田原短期大学准教授

楽活動ができることを目指し、ピアノのコード付け伴奏技能の学習に取り組んでいる。

実際の教育現場で苦手とされがちなピアノ伴奏の技能であるが、ピアノを習ったことがない者にとっては、大譜表の伴奏譜を両手で演奏することは大変難易度の高いことである。弾くことに精いっぱいになってしまえば、子ども達が楽しんで演奏したり、意図をもって表現する活動ができないため、音楽IAの授業では、単にピアノを弾くための技能や知識を学ぶのではなく、より負担が少なくかつ楽曲の魅力を引き出すことができるコード伴奏の技能の修得を目指している。コード伴奏技能は応用力にたけており、その知識技能を生かすことで課題である歌唱共通教材だけでなく、他の楽曲でも自らコードを付けて伴奏することができるため、将来役に立つ技能として期待できるものである。

この授業は1クラス40名前後の集団で行われる。2016年度からは15回中5回、2017年度以降は7回の歌唱クラス導入し、器楽クラスと歌唱クラスのオムニバス形式で授業が行われている。歌唱クラスでは、1名の教員により歌唱の基礎や、歌唱共通教材の理解、表現のほか、音楽の基礎知識や理論的知識について授業が行われ、器楽クラスでは、教員の頭上にカメラを設置し、ピアノ上での手の動きを3台のモニターに映し出しながら、各学生1台ずつ電子ピアノを使用し実践的なコード付け伴奏の授業を行っている。器楽クラスではこのような環境のもと、集団による講義形式の授業と2名の教員が学生個人に指導をする個人レッスンの授業を取り入れ、学生一人一人の習熟度に合わせたきめ細かい指導を行っている。

2013年度から始まったこの取り組みだが、2016年度の先行研究では、2015年度に行った学生アンケートの結果とこれまでの授業内容、受講学生の様子から明らかになった課題について考察した。これらの様々な課題を改善するため、2016年度より授業内容を見直し、歌唱クラスを導入するなどの授業改善を行うとともに、2017年にテキストを改訂し2017年度授業より使用を開始した。本研究では、2016年度～2017・2018年度の授業内容や形態の改善点及び2017年度より導入した改訂版テキストの内容、旧テキストからの変更点等について論ずると共に、2015年度～2018年度までの学生アンケートを比較しその効果について考察する。

(明和史佳)

## II. 研究の目的と方法

本研究の目的は、小学校教員免許取得のための必修授業である「音楽I」の授業形態の変更と授業テキストの改訂が、小学校での音楽活動や音楽授業を行うために必要な知識や技能の習得に効果をもたらしているのかどうか明らかにすることである。研究の方法は、2015～2018各年度の前期と後期の定期試験終了後実施した学生アンケートの結果の分析である。小学校歌唱共通教材を用いて、音楽の基礎知識、鍵盤楽器によるコード伴奏法の技能を身に付けるために授業改善を行った2015～2018年度の授業形態の変更とその効果、授業改善を重ねていく中で必要となった改訂版テキストの作成と使用の実践結果について分析し、今後の可能性や課題を考察する。研究に関わ

る各年度実施アンケート掲載については承諾を得ている。

(望月たけ美)

### Ⅲ. 研究の内容

#### 1. 2015年度～2018年度の授業形態の変更

小学校教員養成機関であるA大学では、2015～2018年の4年間において、小学校歌唱共通教材を用いたピアノによるコード伴奏付け授業を小学校教員免許取得に関わる必修科目として位置づけてきた。しかし、入学前の音楽経験がまちまちである学生を対象とした集団授業の形態のあり方について、2015、2016、2017年度毎に検討を重ねてきた。2018年度は、2017年度の授業形態を継続して実施した。2015～2018年度までの授業形態の変遷について下記に示す。

##### (1) 2015年度の授業形態

2015年度は、半期授業として「音楽IA」を開講した。使用したテキスト(山崎正、望月たけ美「初等教育課程のための鍵盤ハーモニイ入門」2013年)は、初めに練習曲1～3、課題曲1～24曲は歌唱共通教材で、ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調、日本の音階による楽曲の順で掲載されており、2015年度ではテキストの掲載曲順に授業を進めた。受講学生は、まず、練習曲1「ちょうちょ」を用いて、ベースコード奏、コード奏、1:2伴奏、2:1伴奏、分散型、アルベルティ型の全6種類の基本伴奏パターンを学び、メロディーに対するコード設定方法について学習する。次に練習曲2「ドイツ民謡」を用いて、鍵盤楽器奏法のための運指と伴奏付け主要コードC、F、G、G7の基本ポジションを学び、更に練習曲3「きらきら星」を用いて、メロディーに学生自身で指使いを記し、伴奏としてふさわしいコードネームを設定する方法を学習する。その後、課題曲である歌唱共通教材について、ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調による楽曲の順で各教材の楽曲説明を受け、授業内で可能な限りの課題曲の習得を目指す。ただし、日本の音階による教材6曲は扱わない。

また、2015年度の受講学生は、国語、社会、数学、理科、生涯スポーツ、心理発達、生涯学習、教育カウンセリングの各専攻毎にまとまって授業を受講した。〈表1〉に、全15回の授業の流れについて示す。

〈表1〉2015年度「音楽1A」授業全15回の内容

授業回	内 容
第1回	・ガイダンスと課題曲説明及び目標の個人設定、音楽基礎知識の解説 ・練習曲1「ちょうちょ」ガイダンスと課題曲説明及び目標の個人設定、音楽基礎知識の解説・練習曲1「ちょうちょ」メロディー奏の実践
第2回	・コードネームの理解とハ長調における主要コードC,G,G7の伴奏ポジションの理解 ・基本伴奏パターン4種類の理解と実践（練習曲1を用いて実践）
第3回	・基本伴奏パターン全6種による伴奏形態の理解と実践（練習曲1による実践）、 主要コードFの伴奏ポジションの理解（練習曲2「ドイツ民謡」による実践）
第4回	・練習曲3「きらきら星」による実践 ・課題曲1「かたつむり」の楽曲説明と演奏の留意事項及び実践
第5回	・課題曲1及び2「虫のこえ」の楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第6回	・課題曲3「ふじ山」、4「夕やけこやけ」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第7回	・課題曲5「春がきた」、6「春の小川」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第8回	・課題曲7「とんび」、8「まきばの朝」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第9回	・課題曲9「おぼろ月夜」の楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第10回	へ長調におけるコードポジションの理解 ・課題曲10「日のまる」の楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第11回	・課題曲11「ふるさと」、12「冬げしき」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第12回	・課題曲13「もみじ」、14「こいのぼり」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第13回	・ト長調におけるコードポジションの理解 ・課題曲15「うみ」の楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第14回	・課題曲16「茶つみ」、17「スキーの歌」楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
第15回	・ニ長調におけるコードポジションの理解 ・課題曲18「われは海の子」の楽曲説明と演奏上の留意点及び実践
試験	授業内の演奏チェックで合格を得た課題曲について、当日教員から指定された楽曲をピアノで演奏する。受講クラス学生の中での公開試験。

【2015年度授業の成績評価の方法】

2015年度「音楽1A」では、授業内の演奏チェックにより得たポイントの合計に、全15回授業終了後の定期試験で、当日指定された課題曲1曲を演奏して得たポイントが加算された総合点が成績評価となる。

〈表2〉2015年度「音楽1A」授業内の評価方法

技能・芸術段階	未完成	コード表	指定伴奏による演奏	表現性がある演奏
ポイント評価点	0	1	1.25	1.5

〈表3〉2015年度「音楽1A」定期試験による評価方法

試験当日指定曲の技能・芸術段階	児童と一緒に歌うことが出来ない演奏内容である。	停まらずに演奏出来る。既習曲を自己のレパートリーに出来ている。	教育現場で学びを活かしていくことが出来る演奏内容である。
試験による加算ポイント	0	1	2

(2) 2016 年度の授業形態

2016 年度では、2015 年度の全 15 回実施授業に対し、3 つの点において大きく変更した。変更点 1 は、これまで半期で行っていたコード伴奏付けを通年授業として開講し、前期 15 回「音楽 IA」を必修科目、後期 15 回「音楽 IB」を選択授業とした。変更点 2 は、「音楽 IA」では小学校 1、3、5 学年歌唱共通教材 12 曲を、「音楽 IB」では小学校 2、4、6 学年歌唱共通教材 12 曲を習得課題曲とした。変更点 3 は、前期後期各全 15 回のうち 5 回を歌唱に特化した授業、10 回をコード伴奏付け授業とし、歌唱授業とコード付け伴奏授業各担当教員が連携を図りながら授業を実施した。コード付け伴奏授業受講学生は全 10 回授業 2015 年度と同様に練習曲 1～3 でコード付けの基本事項を学習した後、1、3、5 学年歌唱共通教材課題曲 12 曲の習得を目指す。また受講学生は、カリキュラムの都合から、第 1～第 5 回と第 11～15 回の授業でコード伴奏付け授業を受け、中間の第 6～第 10 回で歌唱法の授業を受ける学生と、第 1～第 5 回の授業で歌唱法の授業を受け、残りの第 6 回～第 15 回でコード付け伴奏授業を受ける 2 パターンの受講学生に分かれた。〈表 4〉に、「音楽 IA」全 15 回の授業の流れについて示す。

〈表 4〉2016 年度「音楽 I A」授業全 15 回の内容

授業回	内 容
第 1 回	授業の進め方、声の出し方、姿勢、呼吸法、発声練習等について
第 2 回	発声練習と小学校 1 年生の共通教材 4 曲の解説と指導上の留意点、歌唱実践
第 3 回	発声練習、1 年生実践曲の暗譜唱及び 3 年生の共通教材 4 曲の解説と指導上の留意点、歌唱実践
第 4 回	発声練習と 3 年生実践曲の暗譜唱及び 5 年生の共通教材 4 曲の解説と実践
第 5 回	発声練習と小学校 1, 2, 3 年生の共通教材 12 曲の暗譜唱による歌唱小試験
第 6 回	音符の読譜練習、ピアノ鍵盤上のポジショニングと関係理解と実践
第 7 回	コードネーム理論の理解及びコード伴奏ポジション、練習曲による実践
第 8 回	4 種の基本パターンによる伴奏形の理解と習得
第 9 回	1 年生共通教材 1～2 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 10 回	1 年生共通教材 3～4 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 11 回	3 年生共通教材 1～2 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 12 回	3 年生共通教材 3～4 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 13 回	5 年生共通教材 1～2 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 14 回	5 年生共通教材 3～4 曲までの楽曲説明と演奏上の留意点及び実践練習
第 15 回	小学校 1, 3, 5 年の共通教材 12 曲の弾き歌い練習
試験	小学校 1, 3, 5 年の共通教材 12 曲中、当日指定で弾き歌い試験の実施

【2016 年度授業の成績評価の方法】

歌唱授業においては、「音楽 IA」「音楽 IB」各授業の歌唱法第 5 回目の授業で 3 学年分の歌唱共通教材全 12 曲のうち当日 1 曲指定で暗唱試験を行い、成績評価全体の



30%とした。また、コード伴奏付け授業においては、その総合点を成績評価全体の60%とした。定期試験においては、歌唱とコード付け伴奏を総括した弾き歌いによる演奏試験とし、成績評価の10%とした。

### (3) 2017～2018年度の授業形態

2017年、2018年度では、2016年度授業に対し、6つのポイントにおいて変更した。変更ポイント1では、「音楽IA」「音楽IB」における学習課題曲習得内容の変更である。「音楽IA」では、1、2学年の歌唱共通教材全8曲を課題曲とし、「音楽IB」では、3～6学年の歌唱教材のうち、「さくらさくら」「子もりうた」「越天楽今様」「われは海の子」の4曲を除いた12曲とした。変更ポイント2は、必修課題曲を設けたことにある。必修授業である「音楽IA」では、へ長調である「日のまる」とト長調である「うみ」を全受講学生の必修課題曲とした。変更ポイント3は、歌唱法授業とコード伴奏付け授業の隔週授業の実施である。それぞれの授業を隔週で行うことから、歌唱法授業7回、コード伴奏付け授業7回となり、それぞれ歌唱暗唱試験と弾き歌い試験を実施する。変更ポイント4は、使用テキストの変更である。2016年度までの使用テキストを大幅に見直して改定した【理論編】と【実践編】の2冊を併用することにした。変更ポイント5は、受講学生が専攻未定のA～Dの4クラスに分けられており、クラスごとに受講する点である。また、学生は歌唱法とコード付け伴奏授業を交互に受講するため、CAクラスは第1回目授業が歌唱法、BDクラスはコード付け伴奏法となる。授業は、歌唱法とコード伴奏付け授業担当教員が各授業での授業内容を確認し合いながら連携を図って実施する。変更ポイント6は、録画機器の増設である。授業内の演奏チェック以外に使用していた録画によるチェック方法に対し録画機器を2台追加し、学生が演奏チェックを受ける機会を増やした。増設によって演奏力の向上を図ることとした。次の〈表5〉では、授業全15回の内容について示す。

〈表5〉2017、2018年度「音楽IA」隔週の授業内容

授業回	内 容
第1回	ガイダンス、練習曲1「ちょうちょ」メロディー奏の実践、ハ長調主要コードの基本伴奏パターン4種類の理解と実践
第3回	基本伴奏パターン分散和音、アルベルティの理解と実践、練習曲2「ドイツ民謡」課題曲「かたつむり」の解説と伴奏付け実践
第5回	課題曲「かたつむり」「むしのこえ」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第7回	課題曲「春が来た」「夕やけこやけ」の解説と伴奏付け実践
第9回	課題曲「夕やけこやけ」、必修課題曲「日のまる」のハ長調主要コードの解説と実践、演奏チェック
第11回	必修課題曲「うみ」のト長調主要コードの解説と実践、課題曲「ひらいたひらいた」の日本の音階による伴奏方法の解説と実践
第13回	課題曲「かくれんぼ」の日本の音階による伴奏方法の解説と実践、演奏チェック
第15回	授業内の演奏チェックで合格を得た課題曲について、当日教員から指定された楽曲をピアノで弾き歌い演奏する。受講クラス学生の中での公開試験。

〈表6〉2017、2018年度「音楽IB」授業内容

授業回	内 容
第1回	課題曲「ふじ山」「春の小川」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第3回	課題曲「とんび」「まきばの朝」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第5回	課題曲「おぼろ月夜」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第7回	課題曲「うさぎ」「ふるさと」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第9回	課題曲「もみじ」、必修課題曲「冬げしき」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第11回	課題曲「茶つみ」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第13回	課題曲「スキーの歌」、「こいのぼり」の解説と伴奏付け実践、演奏チェック
第15回	授業内の演奏チェックで合格を得た課題曲について、当日教員から指定された楽曲をピアノで弾き歌い演奏する。受講クラス学生の中での公開試験。

### 【2017、2018年度授業の成績評価の方法】

歌唱法の成績評価は、2016年度と同じで評価全体の30%である。コード付け伴奏授業では、これまで通り授業内演奏チェックでポイントを獲得するが、ポイントは技術評価に加え、芸術評価による加算ポイントがあり、1曲習得に対して、最低10ポイント獲得できる。よく工夫している15点、普通12.5点、コード奏10点を基本としているが、演奏に工夫や表現性が見られた場合には、ボーナスポイント1点が加えられる。また、定期試験では、個々の学生が演奏チェックで合格を得た楽曲の中から当日指定された楽曲の弾き歌いを行う。評価の観点は次の5つで、①～⑤の各項目に対し、-2点～2点で評価し、試験での全合計を10点満点とする。

評価の観点は次の5つである。

- ① 停まらずに最後まで通して弾くことが出来るか。
- ② 正しい歌詞で気持ちを込めて歌っているか。
- ③ 歌詞の意味を理解し、楽曲の特徴を捉えて表現（強弱、フレーズのまとまり、リズムの表現）しているか。
- ④ 子どもの発達に即した楽曲理解をし、子どもと一緒に歌うことを意識して演奏しているか。
- ⑤ 表現者、指導者として人前に立つということを意識して臨んでいるか。

コード付け伴奏授業の評価の内訳は、授業内での演奏チェック60%、定期試験10%であり、「音楽I A」「音楽I B」全体では歌唱法3割、コード付け伴奏法7割の評価配分とした。

#### (4) 2015～2016年度の授業形態変更に至った課題

〈表7〉は、2015年度から2018年度までの授業形態についてまとめたものである。

〈表7〉コード付け伴奏授業形態の変遷

	2015年度	2016年度	2017, 2018年度
開講授業	半期のみ開講 「音楽I A」	通年開講 前期（必修）「音楽I A」 後期（選択）「音楽I B」	通年開講 前期（必修）「音楽I A」 後期（選択）「音楽I B」
受講学生	専攻ごと	専攻ごと	A～Dクラスごと
歌唱共通教材 取扱い課題曲	日本音階による楽曲 を除く18曲	「音楽I A」1,3,5学年 12曲 「音楽I B」2,4,6学年 12曲	「音楽I A」1,2学年 8曲 「音楽I B」3,4,5,6学年 12曲
歌唱授業	なし	全5回	全7回 隔週実施
使用テキスト	旧テキスト	旧テキスト	改訂版新テキスト
定期試験内容	コード付け伴奏	暗譜による歌唱と弾き歌い	暗譜による歌唱と弾き歌い

〈表7〉に示すように、2015年度から2017年度までの3年に渡って、毎年授業形態の変更を行ってきた。毎年の変更に至る背景には、各年度の授業形態に課題が見出されたことにある。

#### 【2015年度の課題】

2015年度では、半期授業で日本音階による楽曲を除く18曲の課題曲習得を目指して授業を実施した。しかし、明和・望月（2016）の研究で示すように、授業で実際に取り扱うことが出来たのは2015年度前期で16曲、後期で17曲であり、2012年のコード付け授業実施以来、18曲に至る年度は極めて少ない結果となっている。課題曲18の「われは海の子」は歌唱共通教材24曲中で唯一二長調による楽曲であり、課題曲18を取り扱わないと、学生は二長調によるコード伴奏付けを経験出来ないまま次の学年を迎えることになる。また、小学校学習指導要領（音楽）第3「指導計画の作成

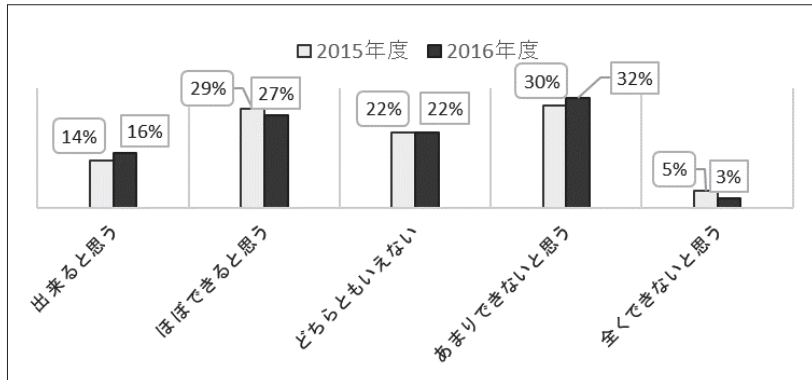


と内容の取扱い」2-(4)アでは、歌唱教材において、我が国や郷土の音楽に愛着が持てるよう、共通教材の他にも親しまれてきた唱歌や各地方に伝承されてきたわらべうたや民謡などの日本の歌を含めて取り上げるようにと示している。しかし、日本の音階による6曲については、授業で取り扱うことが出来ていない。2015年度の課題として、半期15回授業内で、鍵盤楽器の奏法を学び、歌唱共通教材18曲全てのコード伴奏付けの理解と実践を目指すことは時間的に困難であること、日本の音階による楽曲を扱うことが出来ないこと、歌詞の理解や言葉のリズムがメロディーの動きに大きく関わっていることから、楽曲理解を深める必要性が課題となった。

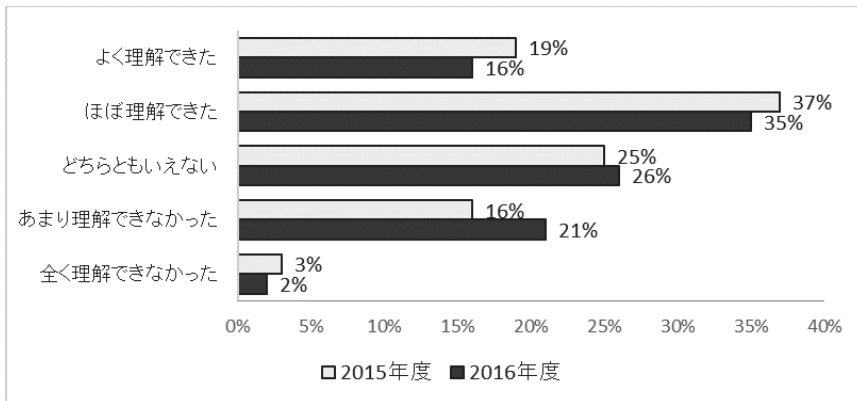
#### 【2016年度の課題】

2016年度では、2015年度までの課題を踏まえて大幅に授業形態を変更した。歌唱法の授業5回とコード付け伴奏授業10回の組み合わせによる授業の実施は、これまでの授業形態に対し画期的な取り組みとなったといえる。また、2015年度までの調性毎に習得していく実践方法ではなく、前期と後期で小学校低学年から高学年までの教材を隔年で分けて実践できるようにした。学生は隔年の教材を学習することで、課題曲を通して子どもの発達の変化に気付くことが出来る事も狙いとした。また、2015年度では扱うことが出来なかった日本の音階による教材も課題曲として学習出来るようになった。歌唱法の授業で共通教材12曲の歌唱を済ませてからコード付け伴奏授業に入ることで、コード付け伴奏に歌唱の経験が活かされると考えた。しかし、コード付け伴奏授業では、10回の授業のうち最初の3回の授業を使ってコード付けの理論、鍵盤楽器の演奏法、基本伴奏形、音楽基礎知識などを説明し、残り7回の授業で3学年分の12曲の共通教材を学習するのは時間的に困難であった。歌唱法の授業と連携した学習効果を期待したが、2015年度と2016年度の授業受講後の学生アンケートの結果では、Q3「ハ長調の楽譜にコードが書かれていない場合、(C, F, G, G7)でコード付けが出来そうですか」、Q4「ハ長調(C, F, G, G7)、へ長調(F, B $\flat$ , C, C7)、ト長調(G, C, D, D7)のコードの仕組みや関係性は理解できましたか」においては〈図1〉、〈図2〉のような結果となった。

〈図1〉 Q3「ハ長調の楽譜にコードが書かれていない場合、(C, F, G, G7)でコード付けが出来そうですか」における2015年度と2016年度の学生アンケート結果の比較



〈図2〉 Q4「ハ長調 (C, F, G, G7)、へ長調 (F, B♭, C, C7)、ト長調 (G, C, D, D7)のコードの仕組みや関係性は理解できましたか」における2015年度と2016年度の学生アンケート結果の比較



〈図1〉の結果では、楽譜にコードネームが書かれていない場合でもハ長調の基本コードネームを使って伴奏が出来るかという質問に対して、出来ると思う・ほぼできると思うと回答している学生は両年度ともに43%であり、全く変化が見られない。また〈図2〉の結果では、ハ長調、へ長調、ト長調の主要コードネームの仕組みや関係性の理解については、よく理解できた・ほぼ理解できたと答えた学生は2015年度で56%、2016年度で51%であり、微小ながら減少してしまっている。2016年度に行った授業形態の大きな変更は、学生のコードネームによる伴奏付けの理解や知識を活かしていく技能に大きな変化をもたらすことは出来ず、逆に理解度や活用度が減少している結果となった。また、歌唱法の授業では、全5回の授業内で課題曲12曲を扱い、暗譜唱試験を行うことで、結果的には歌詞の理解や言葉と連動した楽曲の特性を習得するまでには至らず、新しい取り組みの狙いに反して歌唱法とコード

伴奏付け授業が連動出来ていないことが明らかとなった。

### (5) 2017～2018年度の授業形態のまとめ

2017年～2018年度では、2015年度、2016年度の課題を踏まえて、授業形態を更に大きく変更した。大きな変更点をまとめると次の7つである。

変更ポイント1：「音楽I A」「音楽I B」における学習課題曲習得内容の変更

変更ポイント2：必修課題曲を設けた

変更ポイント3：歌唱法授業とコード伴奏付け授業の隔週授業の実施と連携

変更ポイント4：使用テキストの改訂。【理論編】と【実践編】の2冊を併用する

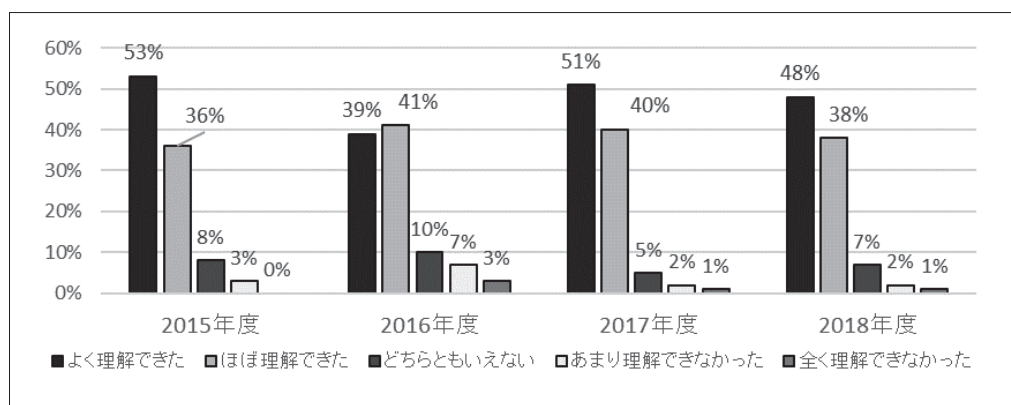
変更ポイント5：受講学生が専攻未定のA～Dの4クラスごとに受講する

変更ポイント6：演奏録画チェック用ビデオの増設

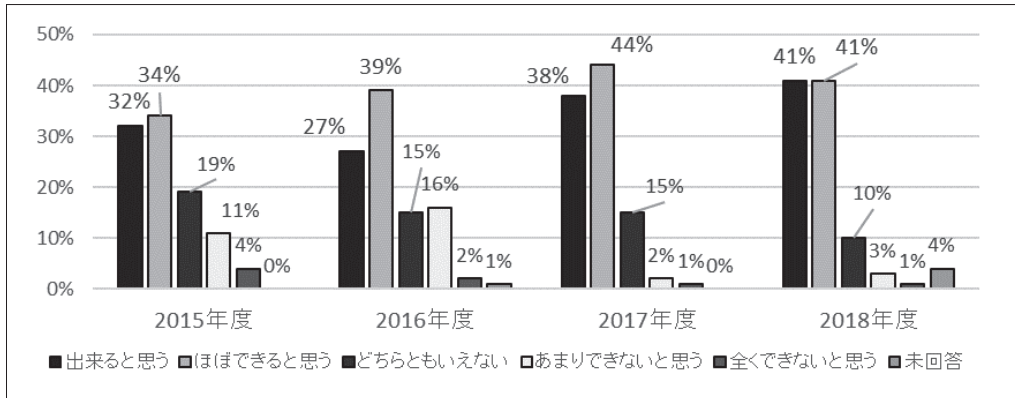
## 2. アンケート結果から見える2017～2018年度の授業改善の効果

2015～2018年度の4年間に渡る受講学生の授業終了時にアンケート調査を実施した。Q1「ハ長調で学習した(C,F,G,G7)のコードの音の構成は理解できましたか」、Q2「ハ長調の楽譜に書かれている(C,F,G,G7)のコードを見ながら、コード付けが出来そうですか」の結果について、〈図3〉と〈図4〉に示す。

〈図3〉 Q1「ハ長調で学習した(C,F,G,G7)のコードの音の構成は理解できましたか」における2015～2018年度調査結果



〈図4〉 Q2「ハ長調の楽譜に書かれている（C,F,G,G7）のコードを見ながら、コード付けが出来そうですか」の結果



〈図3〉では、ハ長調の主要コードネームの構成の理解度について、よく理解できた、ほぼ理解できたと回答した学生は、2015年度89%、2016年度80%、2017年度91%、2018年度86%であり、2017年度では、理解度の上昇が見られた。また、あまり理解できなかった、全く理解できなかったと答えた学生は、2015年度3%、2016年度10%、2017年度3%、2018年度3%であり、2016年度に対して明らかに減少している。

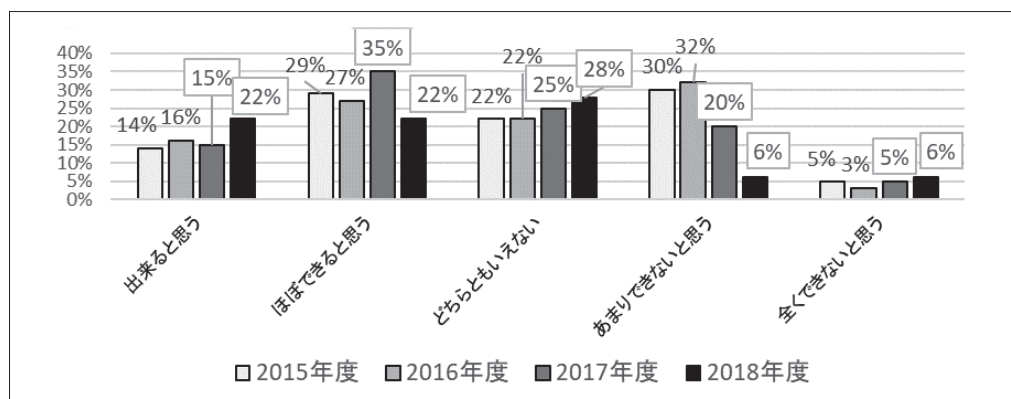
〈図4〉では、ハ長調の楽譜に書かれているコードネームを見てコード付けができるかという質問に対し、出来ると思う、ほぼ出来ると思うと回答した学生は、2015年度76%、2016年度66%、2017年度82%、2018年度82%であり、2017年度以降のハ長調によるコード付け技能の上昇が見られた。特に2018年度では、出来ると思うと答えた学生が増加していることが分かった。また、あまりできないと思う、全くできないと思うと回答した学生は、2015年度15%、2016年度18%であったが、2017年度では3%、2018年度では4%であり、明らかに減少している。〈図3〉と〈図4〉の結果から、2017～2018年度の授業形態によるハ長調のコードネームの理解について、授業改善による効果が見られたといえる。

### 3. 2017～2018年度の授業の課題

前述のように、2017～2018年度の授業で行った6つの変更ポイントによって、学生のハ長調の主要コードネームにおける構成音の理解、書かれているコードネームを見て伴奏付けを行うことについては向上が見られたといえる。しかし、Q3「ハ長調の楽譜にコードが書かれていない場合、（C,F,G,G7）でコード付けが出来そうですか」に対するアンケート結果では、〈図5〉のように出来ると思う・ほぼ出来ると思うと回答した学生が増えた一方で、どちらともいえない、全く出来ないと思うと回答した学生は増加しており、授業改善の効果が得られなかったことも分かった。全くできないと思うと回答する学生をゼロにするために、個々の学生の課題や躓きを授業の早い段階で把握しサポートしていく必要がある。また、歌唱法とコード伴奏付け授業を隔

週で実施することから、これまで以上に連携を図り、限られた授業時間を学生が有効に学ぶことが出来る工夫を検討していく必要がある。

〈図5〉 Q3「ハ長調の楽譜にコードが書かれていない場合、(C,F,G,G7)でコード付けが出来そうですか」のアンケート結果から2015～2018年度の比較



(望月たけ美)

#### IV. 2017年テキスト改訂

##### 1. テキスト改訂の背景

2015年度授業最終日に受講学生73名を対象に行ったアンケートでは、各コードの構成音を把握し楽譜にコードが書かれていれば演奏することはできるが、自らふさわしいコードを選択する力や、調が変わってもポジションを移動することで同じはたらしのコードを奏することができるという理論的な理解に課題があること、さらに歌唱共通教材を理解し、音楽性豊かな表現を伴った演奏を目指す感性や、表現力を育成する必要性が明らかになった。(明和史佳・望月たけ美「小学校教員養成課程における音楽技能習得の実践 ―コード付け伴奏学習の授業を通して育まれる指導者としての資質―」常葉大学紀要(教育学部)37号2017年)そこで、授業改善に取り組むと同時に、授業で使用するテキストの改訂を行うこととなり、2017年3月に新テキスト「初等教育課程のための鍵盤ハーモニー入門 改訂版」を出版、2017年4月の授業から導入を開始した。

##### (1) 改訂版テキストの内容

改訂版テキストは、【理論編】と【実践編】の2冊から構成される。【実践編】では練習曲のほか、課題である歌唱共通教材24曲の楽譜が掲載されている。楽譜はメロディーと歌詞のみが書かれており、強弱記号や表現記号、指使い、コードに至るまで演奏に必要な事項を学生自ら書き込み、主体的に考え楽譜を完成させていくスタイルは、旧テキストを踏襲している。一方【理論編】では、旧テキストでは音階のしくみや主要コードネーム、指使い、日本の音階等8ページのみの記載であった理論的内容

を16ページまで拡大し、音名や、拍子記号、音楽に関する記号や用語といった基礎的な音楽知識から、コードの仕組みやコード付けの方法に至るまでの内容を記載した。【理論編】と【実践編】の2冊に分かれていることで、【実践編】の課題に取り組む際に、【理論編】を照らし合わせながら学習を進めることができるほか、振り返り学習もしやすくなるようにした。

## (2) 【理論編】の内容

小学校教員免許取得のための必修科目である「音楽I」の授業は、小学校で音楽活動や、音楽の授業を行うのに必要な音楽知識や楽器演奏の技能を身につけることを目的としている。そのために、コードによるピアノ伴奏技能を身につける学習を通して、単なるピアノ演奏技能だけでなく、読譜や、調、音楽用語といった基礎知識を身につけることを目指している。しかし、実際授業を行ってみると、鍵盤上の各ドの位置がわからなかったり、楽譜の一点ハ音がわからない受講生もあり、課題である歌唱共通教材に取り組む前につまずいてしまい、授業についていけなくなってしまう状況がみられた。そこで、旧テキストでは、コード付けをするのに必要な理論的知識（音階やコードネームに関するもの）のみを掲載していたが、初歩的な音楽知識を思い出してもらうことができるよう、楽譜上の音と鍵盤上の音を関連させた図や、#やbなど変化記号、譜表、五線、音部記号、拍子記号の説明のほか、正しい音符の書き方に至るまでを記載することにした。また、特につまずきがちな音符と休符の種類や付点について細かく説明し、強弱記号やタイやスラーなど奏法を示す記号等の音楽に関する用語、記号についても記した。

さらに、表現豊かな演奏を目指すにあたり学習指導要領を意識し、音楽を形作っている要素のうち「メロディー」「リズム」「ハーモニー」「テンポ」の4つについて説明を記載した。「メロディー」に関しては、それぞれの楽曲のメロディーの曲想、特徴を捉え、歌詞との連携を意識しフレーズのまとまりや流れを感じて演奏することが大切であること、また、学生がどうしてもあいまいな演奏となってしまうがちな「リズム」の表現については、歌唱共通教材の楽曲の中で出てくる付点のリズムや、複付点、4分音符と8分音符の組み合わせなどの特徴的なリズムを挙げ、楽曲の雰囲気や特徴を決定づける重要な要素であり、楽譜から正しいリズムを表現する必要があること、子どもたちがリズムの面白さを感じ、楽しんで歌うことができるよう導く必要があることを記した。「ハーモニー」に関しては、Tonic、Dominant、Sub-dominantの特徴とはたらきを記し、ハーモニーがあることで、音楽がより色彩豊かなものになり情感や曲想を感じとりやすくなることを記述した。「テンポ」については、曲を味わって表現するよりもBGMのように聞き流すイメージを持っている学生が多く、児童と一緒に歌うことを想定できずに、はやめのテンポで演奏してしまう学生がみられるため、楽曲にふさわしいテンポで演奏すること、さらに児童の発達段階に応じて曲を楽しんだり、美しさを感じて表現することができるテンポで演奏することが大切であることを記した。また、学習指導要領でも頻繁に記述されている「曲想と楽曲の構造の



関わりに気づくこと、理解すること」を実現するために、基礎的な楽曲構造や各種形式についての内容を新たに記載し、課題である歌唱共通教材の楽曲がどんな形式になっているか考え、形式を意識した演奏表現ができることを目指した。

旧テキストで唯一記載されていた理論的内容であるコード付けに関する部分でも、新テキストでは、さらにわかりやすくなるようより詳しく説明を記した。まず、調の名前を覚えるには日本語式表記の音名が、コードを学ぶには英語式表記の音名を知ってもらう必要があるため、音名3種の対照表を記載したほか、コード付けのポイントにもなる順次進行、跳躍進行について、さらに音階についても説明を記した。音階については歌唱共通教材に出てくる長音階（ハ長調、ト長調、ヘ長調、ニ長調）を取り上げ、2つのテトラコードによって構成され、主音が何の音で始まっても同じ音程関係の配列パターンを持つこと、さらに音階の中で第1音（主音）、第4音（下屬音）、第5音（屬音）、第7音（導音）という重要な働きともつ音があることに触れた。コードネームについては、三和音のしくみや、コードネームの表記法、各調の主要三和音について説明を記し、根音の上に3度ずつ音を積み上げたものが基本コードであるということが理解しやすくなるようにした。さらに、和音の転回についても触れ、実際にコード伴奏を弾く際の基本ポジション（和音を転回し、よりスムーズにかつ跳躍なくコード伴奏ができる形にして演奏する）を理論的に理解できるようにした。

〈表8〉旧テキストと新テキストの理論的内容の比較

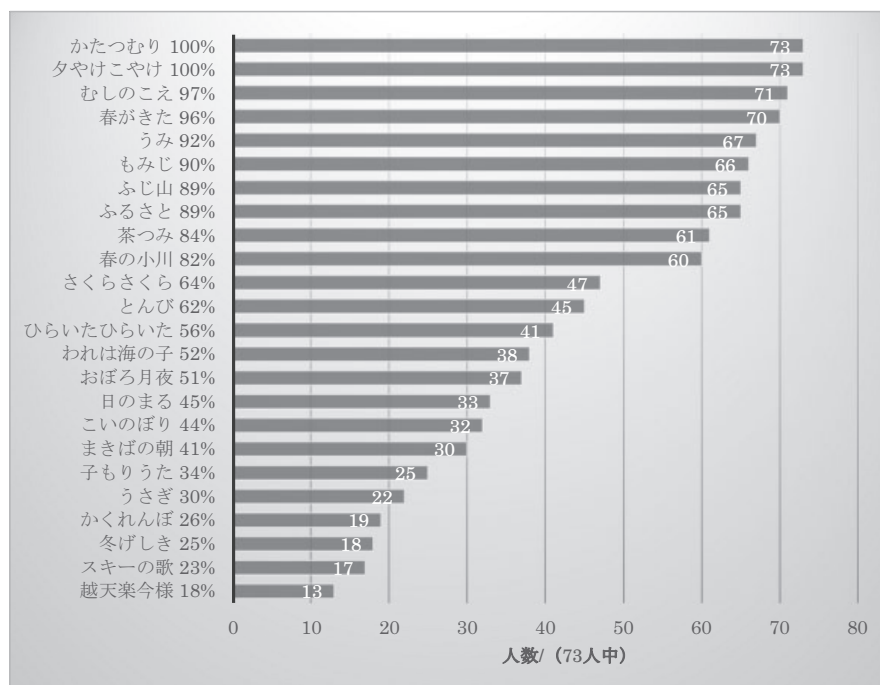
旧テキスト	新テキスト【理論編】
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音階について</li> <li>・音階の作り方</li> <li>・音階のコードネーム</li> <li>・音階上の主要コードネームの比較</li> <li>・6つの調の主要コードネームと基本ポジション</li> <li>・コード判定について</li> <li>・指使い</li> <li>・日本の音階</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音名</li> <li>・譜表（五線・音部記号）</li> <li>・拍子記号</li> <li>・音符の書き方</li> <li>・音符と休符</li> <li>・音楽に関する記号・用語</li> <li>・指使い</li> <li>・音楽を形作っている要素</li> <li>・形式</li> <li>・音階と調</li> <li>・コードネーム</li> <li>・コード付け</li> <li>・日本の音階</li> </ul>

### (3) 【実践編】の内容

前述した2015年度の学生アンケートにより歌唱共通教材に対する学生の周知度を調査したところ、24曲中半数以上14曲の認知度が65%を下回り、50%に満たない楽曲も9曲あった。（〈図6〉明和史佳・望月たけ美「小学校教員養成課程における音楽技能習得の実践—コード付け伴奏学習の授業を通して育まれる指導者としての資質—」常葉大学紀要（教育学部）37号2017年より）したがって各歌唱共通教材の理解

を深め、子どもたちに感じてほしい曲の良さや楽しさを実感できることを目指し【実践編】テキストの作成と見直しを行った。

〈図6〉2015年度アンケート設問1「課題である音楽歌唱共通教材の24曲の中で、知っていた曲や今まで歌ったことがある曲に☑をつけてください。」の回答結果



新テキストの【実践編】では、課題曲それぞれの楽曲情報を記載するだけでなく、その特徴や音楽を形作っている要素、演奏のためのポイントを学生自らが感じ取り、テキストに書き込むことで、歌唱共通教材の理解と表現を深められるようにしたいと考えた。そこで旧テキストでは、楽曲は楽譜片面1ページずつ掲載し、歌詞や楽曲の情報を巻末にまとめて記載していたのに対し、新テキストでは見開き1ページを使い左ページに楽譜、右ページには、縦書きの歌詞を掲載した他、楽曲に関することや、コード付けのポイント等を書き込めるようにした。2016年度から歌唱クラスを授業に取り入れたこともあり、歌唱共通教材の歌詞の意味を考え、情景を想像したり、特徴的なリズムやふさわしいテンポ感、表現方法を学び、それらを書き込むことができるよう、各課題の楽譜の右ページにはメモ欄や空五線といったスペースを設けた。

〈表9〉旧テキストと改訂版テキスト【実践編】の主な変更点

	旧テキスト	改訂版テキスト【実践編】
構成	片面1ページ（楽譜のみ）	見開き1ページ（左ページに楽譜、右ページに楽曲情報欄、メモ欄、空五線を記載）
歌詞、楽曲情報の記載方法	巻末に全曲の歌詞、楽曲情報をまとめて記載	楽曲ごとに楽曲情報を記載（作詞者、作曲者、調、拍子、形式、特徴を学生自ら書きこむ）
歌詞の取扱い	巻末に全曲の歌詞を記載し、楽譜内には学生自ら歌詞を書き込ませるスタイル	あらかじめ楽譜内に歌詞を記載
楽曲の掲載順番	調ごとに掲載（ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調、わらべ歌の順番に掲載）	学年ごとに掲載（第1学年から順番に掲載）

## 2. アンケート結果からみえるテキスト改訂の効果

2015年度、2016年度のアンケート結果と、改訂版テキストを導入した後に行った2017年度、2018年度学生アンケート結果を比較し、その効果を考察する。それぞれのアンケートの実施状況と内容は以下の通りである。

〈表10〉2015年度～2017年度アンケート実施状況

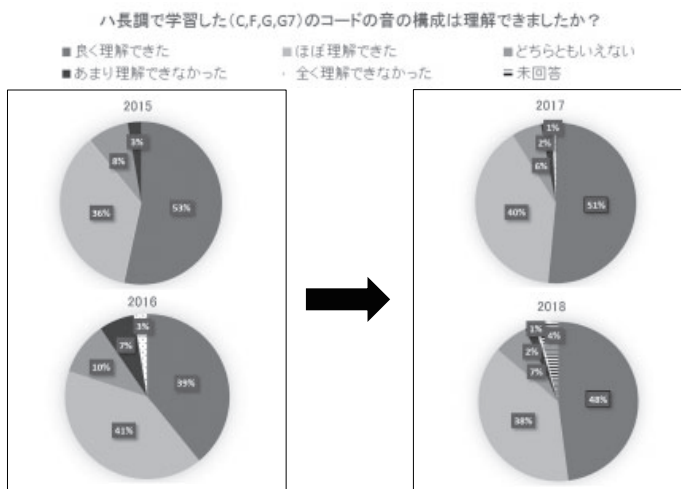
	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
実施年月	2016年 1月	2016年 7月～8月	2017年 7月～8月	2018年 7月～8月
受講学生数（回答数）	73名	115名	134名	146名

〈表11〉アンケート内容

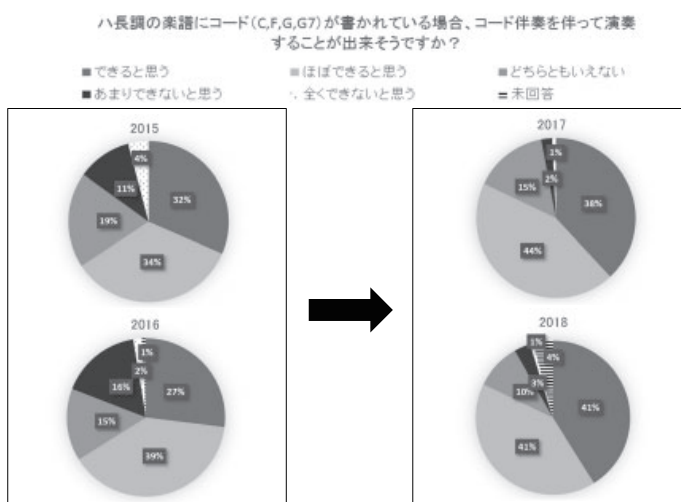
1	ハ長調で学習した（C,F,G,G7）のコードの音の構成は理解できましたか？
2	ハ長調の楽譜にコード（C,F,G,G7）が書かれている場合、コード伴奏を伴って演奏することが出来そうですか？
3	ハ長調の楽譜にコードが書かれていない場合、（C,F,G,G7）で自らコード付けをし、演奏するができそうですか？
4	ハ長調（C,F,G,G7）、ヘ長調（F,B♭,C,C7）、ト長調（G,C,D,D7）のコードの仕組みや関係性は理解できましたか？

アンケートでは「ハ長調の基本コードの理解度」「コード奏の修得度」「コード付けの修得度」「コードの仕組みについての理解度」の4点について調査した。各年度の結果は次のとおりである。

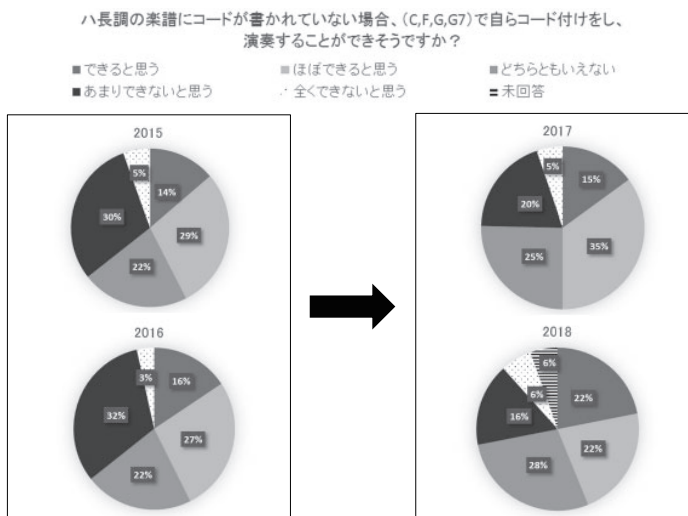
〈図7〉「ハ長調の基本コードの理解度」回答結果



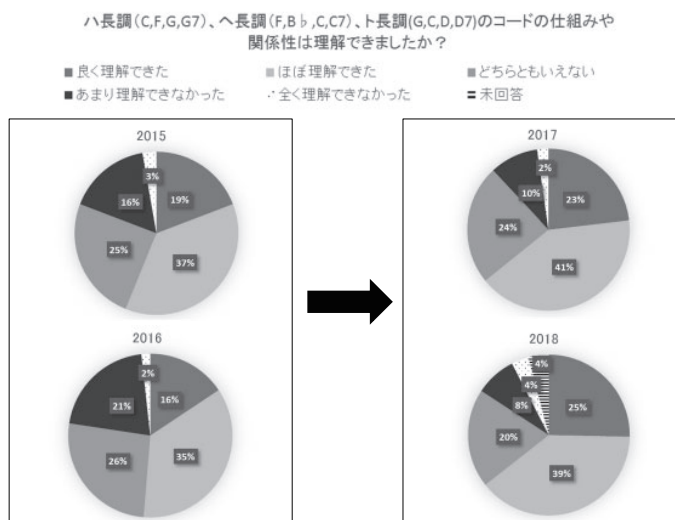
〈図8〉「コード奏の修得度」回答結果



〈図9〉「コード付けの修得度」回答結果



〈図10〉「コードの仕組みについての理解度」回答結果



〈表 12〉各項目「良く理解できた」「ほぼ理解できた」または「できると思う」「ほぼできると思う」と回答した割合の変化

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
ハ長調の基本コードの理解度	89%	80%	91%	86%
コード奏の修得度	66%	66%	82%	82%
コード付けの修得度	43%	43%	50%	44%
コードの仕組みについての理解度	56%	51%	64%	67%

〈表 13〉各項目「全く理解できなかった」「あまり理解できなかった」または「全くできないと思う」「あまりできないと思う」と回答した割合の変化

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
ハ長調の基本コードの理解度	3%	10%	3%	3%
コード奏の修得度	15%	19%	3%	4%
コード付けの修得度	35%	35%	25%	22%
コードの仕組みについての理解度	19%	23%	12%	12%

まず「ハ長調の基本コードの理解度」においては、テキスト改訂版を導入した 2017 年以降とその前とでは大きな変化はみられなかった。一方、楽譜にコードが書かれている場合コード奏ができるかという「コード奏の修得度」は 2015 年度と 2016 年度 66% の学生が「できると思う」「ほぼできると思う」と回答したのに対し、2017 年度、2018 年度では 82% と大きく向上し、ハ長調の基本コードの理解度に迫るものとなった。楽譜にコードが書かれていない場合に自らコードを付けて演奏できるかという「コード付けの修得度」については、「できると思う」「ほぼできると思う」と回答した学生が 2015 年度、2016 年度は 43% であったのが、2017 年度は 50%、2018 年度は 44% と少しだけ向上がみられた。しかし「全くできないと思う」「ほぼできないと思う」と回答した割合をみると、2015 年度、2016 年度が 35% だったのに対し、2017 年度は 25%、2018 年度は 22% となっており、特に「ほぼできないと思う」と回答した学生が減少していることがわかった。調が変わってもポジションを移動することでコード付けができるという「コードの仕組みについての理解度」も「良く理解できた」「ほぼ理解できた」と回答した割合が 2015 年度 56%、2016 年度 51% から 2017 年度 64%、2018 年度 67% に向上しており、課題であったコードの他調での応用に効果がみられた。ハ長調の基本コードの理解度に関しては、テキスト改訂版導入前からすでに理解度が高かったため、大きな変化はみられなかったが、その他の項目に関して差はあるもののテキスト改訂版を導入したことにより、学習の効果が上がったといえることができる。

実際に改訂版テキストを導入してみて、これまで理論的内容を説明するために多くのことを板書していたが、テキストを参照することで板書をする時間を省略することができ、非常に効率的に授業を進められるようになった。以前は学生も板書をノート



に写そうとするが、正しく写し切れず間違った知識を身につけてしまうこともあったが、テキストを参考にしてメモを取るためそのようなことが少なくなり、よりわかりやすく理論的内容を説明することができるようになった。こういった理論的説明を丁寧、よりわかりやすくしたことが、アンケート結果の修得度の向上につながったと考えられる。また、【理論編】と【実践編】がそれぞれ独立しているため、【実践編】で課題を学習しながら【理論編】を確認することができ、より授業を円滑に進めることができるようになったほか、振り返り学習がしやすくなり、知識の定着を以前よりも図ることができていると感じられる。将来教員になった際に役に立つそれぞれの1冊を自ら作成するという、この授業開始当初からの特徴と意図もより達成できるようになった。

### 3. 課題

学生アンケート結果から、テキスト改訂版を使用したことにより各項目全てにおいて向上がみられたとはいえ、コード付けの修得度は「できると思う」「ほぼできると思う」と回答したのは約半数であり、「あまりできないと思う」「全くできないと思う」と回答した学生も25%いるため、依然として自らふさわしいコードを選択し伴奏することに課題があると言わざるをえない。コードの仕組みを理論的に理解していても、1小節に1つのコードとは限らない場合や、3拍子の場合の判断が難しかったり、自身でコード付けをしてもそれがふさわしいものであるか判断することに自信が持てないといったことがこの課題の理由として挙げられる。また、授業では歌唱共通教材の良さをより引き出すために、主要コード以外のコードを提示することもあり、それらのコードの響きに「きれい、素敵」などと興味を持ってくれるが、実際学生自らがそれらを応用してコード付けするのはかなり難易度が高いことである。主要コード以外のコードの使用方法についてももう少し学習を深められるよう、さらなるテキスト改善を行うとともに、コード付けには多くの選択方法があり正解は一つではないことを認識し、自らの知識技能に自信を持って今後の活動に取り組めるよう、細やかなフォローや指導を行っていく必要がある。

また、わらべ歌や日本古謡の伴奏付けの仕方についての内容がテキストには不足しているため、今後そのコード付けの方法についても記載をしていく必要があると考える。

(明和史佳)

## V. 全体考察

研究の結果、歌唱クラスを導入し、授業内容を改善するとともに、理論的内容をより細かく記した改訂版テキストを使用することで、学生のコード付け伴奏技能の修得に改善がみられた。これは、歌唱共通教材の理解を深め、コード付けの理論的説明を丁寧に行ったことの効果であると考えられる。まったくピアノを弾いたことがなかった学生も両手で楽曲を弾くことができるようになり、授業の取り組みの成果を実感し

ているように思う。また、以前は自らコード付けをするより、教員が提示する指使いやコードを書き写し演奏する学生が多かったが、最近では自ら指使いを考えふさわしいコードを設定した上で、教員の説明によってそれが正しいか確認するというプロセスを取っており、自らコード付けできる能力を身につけるという目標達成により近づいていると感じられる。

しかし、ある程度コード付け伴奏の技能を身につけることができたとしても、やはり課題をこなすことに目標が設定されがちで、楽曲の良さを味わって演奏したり、子供たちが楽しんで歌ったりすることを想定して演奏できるまでに至っていないと感じられることは多い。豊かな表現性を伴った伴奏を目指すことに関しては、まだまだ課題が残るため、音楽科教育の意義や目標をさらに意識し、子ども達との活動をふまえてどのような演奏が望まれるかを学生自身が考えて取り組める授業を展開できるよう、今後も継続的に研究を行っていきたい。

(明和史佳)

#### 引用・参考文献

- 1) 山崎正、望月たけ美「初等教育課程における音楽実技の現状と試み」常葉学園大学研究紀要(教育学部)第33号2013年163頁～192頁
- 2) 明和史佳・望月たけ美「小学校教員養成課程における音楽技能習得の実践 ―コード付け伴奏学習の授業を通して育まれる指導者としての資質―」常葉大学紀要(教育学部)37号2017年177頁～200頁
- 3) 山崎正、望月たけ美「初等教育課程のための鍵盤ハーモニー入門」2013年 篠原印刷出版部
- 4) 山崎正嗣監修、明和史佳編著、望月たけ美著「初等教育課程のための鍵盤ハーモニー入門 改訂版」2017年 篠原印刷出版部
- 5) 小学校学習指導要領 平成29年3月告示 文部科学省
- 6) 初等科音楽教育研究会編 小学校教員養成課程用 最新初等科音楽教育法 2017/18年告示「小学校学習指導要領」準拠 音楽之友社
- 7) 中等科音楽教育研究会編 中学校・高等学校教員養成課程用 最新中等科音楽教育法 2017/18年告示「中学校・高等学校学習指導要領」準拠 音楽之友社
- 8) 島川香織「弾き歌いの演奏表現における知識の再構成」2019年 日本学校音楽教育実践学会第24回全国大会・自由研究6
- 9) 日本学校音楽教育実践学会 学校音楽教育研究 2019 Vol.23 2019年3月
- 10) 日本学校音楽教育実践学会 学校音楽教育実践論集 2019 No.3 第3号
- 11) 斎藤 完・岡崎美夏「音楽科教育の現場におけるピアノ伴奏に対する認識」2011年3月 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第31号 71～81頁